様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１１日現在

機関番号：８２６２２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０１１７
研究課題名（和文）　西洋近世版画史の一次史料調査

研究課題名（英文）　Survey of Historical Documents Related to European prints of the 15th to 18th centuries

研究代表者
渡辺　晋輔（WATANABE　SHINSUKE）
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：50332143

研究成果の概要（和文）：イタリア、ネーデルラント・フランドル、ドイツ、フランスを専門とするメンバーが、それぞれ 15 世紀から 18 世紀までの西洋版画史に関する一次史料を収集し、史料集を作成した。また、いくつかの史料については翻訳も行った。そして、集積した史料をもとにして、当時版画がどのように生産・消費され、評価されたのかを考察した。その成果は学会発表、論文、書籍で発表したほか、研究報告書の形でまとめ、出版した。

研究成果の概要（英文）：Historical documents related to European prints of the 15th to 18th centuries were collected and examined for information regarding print production, consumption and evaluation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 22 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
平成 24 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：美術史、版画

１．研究開始当初の背景

西洋において、15 世紀から 18 世紀のあいだに版画が大きな発展を遂げたこと、また、美術の制作の手本として、あるいはイメージの伝達のために、きわめて大きな役割を担ったことは、周知の事実である。

この時期の版画には、元となるイメージを伝達する、複製としての側面が強かったために、美術史研究において、版画の扱いは少々特殊なものとなった。すなわち、版画を制作したのが画家自身であるのか、それとも、画家が（油彩や壁画などの形で）描いたオリジナルを、版画家が“複製”したものであるのかという区分が、作品の評価の基準となってきたのである。

こうした評価基準の背景には、版画研究が開始された 19 世紀前半のフランスにおいて、ちょうどロマン主義的な芸術観が主流であったことが大きい。そしてロマン主義的な価値判断に基づく版画の評価が、そのまま現代まで受け継がれることとなってしまったのである。

もちろん、こうした姿勢に対する批判は存在したが、しかし近年の版画史研究は、作品の観察のみに根差したものに偏っている印象があった。一方、版画史に関する一次史料はほとんど知られておらず、ダイジェストの形でも、版画関連の史料集は存在していなかった。

たとえば、イタリア・ルネサンスの版画史

を語るうえで最も重要な一次史料と言えるヴァザーリの『芸術家列伝』第 2 版（1568 年）の「マルカントニオ・ライモンディ伝」、もしくは北方における版画の発展を語るうえで重要なカーレル・ファン・マンデル『北方画家伝』等、版画史に関する一次史料は、その存在と内容が我が国においてはほとんど知られていない。欧米においても、作品が制作された当時の評価から離れて、版画史の研究が行われている場合が多いように思えた。

それゆえ、版画史に関連する一次史料にどのようなものが存在するのかをまとめ、紹介することが必要と考えた。また、作品が制作された同時代において、どのように版画が扱われていたのかを、一次史料を通じて考察し、版画の実際のあり方を客観的に判断すべきであろうと思った。

２．研究の目的

15 世紀末から 18 世紀までの、イタリア、ネーデルラント・フランドル、ドイツ、フランスというヨーロッパほぼ全域を対象とし、版画にまつわる一次史料（契約書、手紙、日記、文学作品など）を収集し、史料集を作成することを第一の目的とした。

収集した一次史料のいくつかについては、日本語に翻訳し、今後の調査・研究の基礎とすることを目指した。

さらに、一次史料を読み込み、版画が同時代にどのように扱われ、評価されていたのかを検証することにした。また、史料の記述と版画そのものを比較することにより、記述をなした人物が、版画のどのような面に注目していたのかを考察し、確認することを目指した。

以上の作業を通じて、可能であれば、版画史研究のあり方を見直すことまでを射程に置いた。

３．研究の方法

ヨーロッパの版画自然体をカバーできるよう、イタリア、ネーデルラントおよびフランドル、ドイツ、フランスの版画史に精通した美術史の専門家 4 名によってチームを組織した。

各々はまず、各自の専門に関する二次文献を読み進め、一次史料の目録を作成した。その際、海外の図書館や版画素描館にも足を運び、史料の発掘に努めるとともに、各国の研究者たちと情報交換を行った。

特に研究代表者の渡辺は、2012 年にウィーンで開催された国際版画素描キュレーター会議に出席したことから、多くの専門家からの助言を得ることができた。また、チューリヒ工科大学版画素描室やウフィツィ美術館版画素描室において現地調査を行った。

各々は収集した一次史料の読み込みを進めることにより、史料を総括的に整理し、史料集を作成した。また、いくつかの一次史料については日本語訳も行った。当初は、ヴァザーリによる上記の「マルカントニオ・ライモンディ伝」の翻訳も計画していたのだが、本研究の採択後に、ヴァザーリの『芸術家列伝』の全訳が現在進行中であり、近年中に刊行されることを知り、断念した。

一次史料集の作成の一方、それを読み込むことによって、同時代における版画のあり方や版画観を考察した。各自の研究の成果はその都度、学会発表や論文・著書の形で公としたが、最終年度に研究報告書をまとめ、その中に一次史料集とともに、各自の論文をまとめて収録した。

４．研究成果

研究の過程で得られた知見や考察を、その都度発表した。「５．主な発表論文等」において詳述するように、雑誌論文は 2 件、学会発表は 2 件、図書は 7 件を数える。

このうち、代表的な研究成果と言えるのは、今年 3 月に出版した本研究の報告書『西洋近世版画史の一次史料調査』である。論文と翻訳、一次史料集からなるこの報告書は、最初に論文と翻訳を載せ、巻末に国別に一次史料集を収録した。

まず論文編について述べると、イタリア版画史を担当した研究代表者の渡辺は、2 本の論文を掲載した。一つは、『ラファエロ展』カタログの巻頭論文の再録であり、後世におけるラファエロの受容を論じたものだが、この論文の一部では、ヴァザーリが（オリジナルとは齟齬のある）版画をもとにしてラファエロ作品について記述したために、混乱が生じたことに触れている。ラファエロの造形は、文章による記述と版画という、それぞれオリジナルとは齟齬のある手段によって伝播したので、それが混乱を引き起こすことがあった。その一方で、美術の規範たるラファエロの再来という印象を植え付けるため、ヴァザーリは齟齬を黙認し、さらには利用したのであった。

もう一つの論文は、2011 年に行った学会発表をもとにしたものであり、16 世紀末の画家アンニーバレ・カラッチが、ラファエロの原画によるマルコ・デンテの版画をイメージソースとしたこと、またその際に、この版画家に関するヴァザーリの記述を念頭に置いていたことを明らかにした。アンニーバレはヴァザーリの記述によって、マルコ・デンテの版画がラファエロの原画によるものであることを確認し、ラファエロの威光を利用する

ために、そのモティーフを自作の中に引用したと考えられる。

ネーデルラントとフランドルの版画史を担当した幸福は、カーレル・ファン・マンデルの『北方画家伝』中の版画関連の記述について論じたほか、同書中の版画関連の記述を翻訳した。そして記述の分析によって、マンデルが版画をきわめて高く評価していたこと、それには人文主義者たちによる版画評価が反映していたことを明らかにした。レンブラントに代表される 17 世紀オランダの偉大な版画伝統は、こうした潮流に位置づけられるのである。

ドイツ版画史担当の保井は、ヨアヒム・フォン・ザントラルトの著書『ドイツのアカデミー』について、版画関連の部分を特定するとともに、特にアブラアム・ボスの著書『腐蝕銅版画技法』との関連から論じた。その結果、この時期のドイツではボスの著書の内容に対し、いまだ需要があったことが確認できた。と同時に、同書のなかで版画の直彫り法（エングレーヴィング）を「彫刻」の一分野と位置づけていることから、当時における版画の位置づけを知ることができた。また、この直彫り法に関する記述については、翻訳も行った。

フランス版画史担当の陳岡は、アブラアム・ボッスの銅版画技法書の、18 世紀フランスにおける受容を辿った後、シャルル＝ニコラ・コシャンの改訂版について論じた。そこから浮かび上がるのは、コシャンによる（エングレーヴィングに対する）エッチング擁護の姿勢である。彼はエングレーヴィングを職人的な技芸と結びつける一方で、エッチングを画家の知性やよき趣味と重ね合わせ、それゆえそれらが必要とされる歴史画の制作には、エッチングがふさわしいとしたのである。そしてこの姿勢からは、版画、もしくは複製という概念の中に、幾層もの評価が存在していたことが明らかとなった。

以上が論文集の概要である。これに続き、報告書の巻末には、詳細な一次史料集を収録した。とはいえ版画に関する一次史料は膨大な量が存在するので、収録しえたのはそのうちのごく一部にとどまった。それゆえ、編者によってやや収録史料の選択方法が異なることとなった。

本研究は、一次史料を読み込むことで版画史をとらえ直すというところまでは、踏み込めなかった。しかし、一次史料に対峙することによって、「オリジナル／複製」という版画史の図式が、あまりにも単純化しすぎたものであることが、明らかとなった。

上記の諸論文が明らかとするように、オリジナル、あるいは複製という概念は決して二項対立のものではなく、通常「複製版画」と呼ばれる作品を作っていた版画家も、それを消費していた側も、単純な複製とは考えず、そこには版画家のオリジナリティー――言い換えれば知性やよき趣味――が反映されていると考えていたし、さらには文章による作品記述と複製版画による作品の叙述に複雑な絡み合いがあることもあった。また、版画全般を彫刻の一分野とすることにより、格の高い芸術と見なす試みもなされていたのである。

以上のことを明らかにしえたこと、また、付随して多くの成果を出すことができたことから、本研究は、当初の目的を十分に達成しえたと考える。特に報告書に収録した史料集は、今後の版画史研究にとっての土台を提供しえたのではないだろうか。なお、本研究の成果は、いくつもの展覧会カタログの記述にも反映されていることを、最後に記しておく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①陳岡めぐみ「19 世紀フランスの複製版画―紙の手ざわり」『青淵』1 月号、査読無、2010 年、pp. 22-25

②Megumi Jingaoka, “La donation au Louvre, en 1873, du tableau de Canstable La Baie de Weymouth, côté coulisses ：Léon Gauchez, John W. Wilson et la bataille de l’école anglaise 》, *La Revue du Louvre et des musées de France*, no. 2, 2013. 査読有、pp. 46-56

〔学会発表〕（計 2 件）

①渡辺晋輔「アンニバレ・カラッチによる版画の利用―ファルネーゼ宮“カメリーノ”天井装飾をめぐって―」美術史学会東支部例会、2011 年 11 月 26 日（学習院大学）

②保井亜弓「マイクロスコープによる原版調査の試み－アブラアム・ボスを中心として」第 22 回金沢芸術学研究会、2012 年 2 月 8 日(金沢美術工芸大学)

〔図書〕（計 7 件）

①保井亜弓『ベルギー王立図書館所蔵　ブリューゲル版画の世界』（共著・展覧会カタログ）、Bunkamura　ザ・ミュージアム他、2010 年、282 頁

②幸福輝『レンブラント――光の探求／闇の誘惑』（共著・展覧会カタログ）日本テレビ放送網株式会社、2011 年、358 頁

③陳岡めぐみ『ユベール・ロベール――時間の庭』（共著・展覧会カタログ）国立西洋美術館ほか、2012 年、311 頁

④幸福輝・保井亜弓「レンブラントの『東洋紙刷り版画』とその受容について」『レンブラント　光の探求/闇の誘惑［論文集］』［日英］、国立西洋美術館、2012 年、156 頁

⑤保井亜弓『入門ルネサンス』共著、洋泉社、2013 年、112 頁

⑥渡辺晋輔『ラファエロ展』（共著・展覧会カタログ）読売新聞東京本社、2013 年、248 頁

⑦渡辺晋輔、幸福輝、陳岡めぐみ、保井亜弓『西洋近世版画史の一次史料調査』（平成 22－24 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究報告書）、2013 年、48 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　晋輔（WATANABE　SHINSUKE）
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：50332143

(2)研究分担者
幸福　輝（KOFUKU AKIRA）
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・客員研究員
研究者番号：00150045

(3)研究分担者
陳岡　めぐみ（JINGAOKA　MEGUMI）
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：50409702

(4)研究分担者
保井　亜弓（YASUI　AYUMI）
金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授
研究者番号：30275086